

『高良山十景詩歌』の反響

井上, 敏幸

<https://doi.org/10.15017/4755961>

出版情報 : 雅俗. 3, pp.8-24, 1996-01-10. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :

『高良山十景詩歌』の反響

井上敏幸

高良山第五十世座主寂源は、後水尾天皇より書博士の名を賜った大師流の能書家藤木敦直（一五八二～一六四九）の四男で、初名を宗直と名乗ったが、出家して比叡山は横川の般若谷龍禪院へ入り実源と称し、同院第四世となる。のち今出川晴季公の猶子となり、寛文九年（一六六九）四十歳、比叡山・日光門跡輪王寺宮一品親王守澄法親王にすゝめられて、筑後高良山座主職となる。それより元禄八年六月（一六九五）辞職を許されて京都に戻るまでの二十六年間、高良山中の月光院、また蓮台院に清僧として住し、山内の復興に力を尽し、中興の座主として永く称えられた。元禄八年十一月頃京へ戻り、鷹ヶ峰に隠棲し、翌九年二月二十三日、同所において六十

七歳の生涯を閉じたとされている。しかし、寂源の墓は、現在近江坂本より横川へ行く行者道脇の飯室谷恵心僧都墓の域内にある。卵塔の正面に「元禄九年歳次丙子二月二十三日卒」と刻まれている。また、この卵塔の後方に昭和十五年建立の石碑があり、それには、

龍禪院第四世寂源僧正。字一如。俗姓藤木氏。城州賀茂人。歴世有能筆称。至僧正。中興入木道。後住掌鎮西高良山座主職。元禄八年還。隱栖洛北鷹峰。同九年二月二十三日寂。

とある。この碑文にも明らかかなように、寂源には、龍禪院住職から高良山座主職に転じ、権僧正に任ぜられた高貴な天台学僧の一面と、父藤木敦直の、賀茂流あるいは甲斐流と呼ばれた、空海に始まる大師流の地下の書法伝

授を受けついで当代随一の書家としての一面とがあり、この二つの面が、いわば相乗効果となって寂源の名はいよいよ都鄙に広まったのである。僧侶の面から見てみると、延宝六年六月十七日、京へ上り輪王寺宮守澄法親王とともに、東福門院御悩の祈禱を修し、翌七年五月十六日には、輪王寺宮の命による「任権僧正」の口宣と宣旨を、寂源自ら参内して頂戴している。また、翌延宝八年の將軍家綱薨御に際しては、江戸に召され、八月十七日東叡山本坊にて、経を納め靈牌を拜し、翌日十八日には、鳥目百貫が幕府より寂源に贈られた。^{註5}さらに、貞享三年冬の輪王寺宮の日光登山に随侍していることも知られる。こうした天台僧としての活躍は、寂源の幕府との関わりのお大きさを感ぜさせるが、いま一方の書家の面から見ても同様のことが考えられる。寂源は、書を父敦直に学んだが、父を失った慶安二年以降は、敦直より唯授一人の道統を承けた本荘道芳に学び、寂源も道芳より道統を授けられたのであるが、この道芳の義妹が、五代將軍綱吉の生母桂昌院であり、その縁で道芳は幕府に招かれ、綱吉に近侍することになった人物だったからである。ちな

みに、寛文九年八月十六日、寂源が高良山座主職を仰せつかった折には、この道芳より世尊寺行俊卿真翰の『高良山十講会縁起』を贈られ、「これを懐にして高良山に登り、もって什物に備えた」と寂源自らが識語を残している、その『縁起』が現在も高良山神社に蔵されている。^{註6}一方、筆道における宮廷との関わりも、延宝六年・貞享二年の両度、勅を奉じ東寺の弘法大師真跡を臨書したことに象徴されている。寂源の名声は、鍋島直條の言を借れば、「当時ノ天子王侯悉ク之ヲ師トス。今上皇帝、公ニ勅シテ、高野大師ノ筆意ヲ摸セシム。既ニ成リテ之ヲ獻ジ、辱ケナクモ宸翰ノ和歌ヲ賜フ。時ノ人、之ヲ榮トス」といったものであった。また、幼年期より高良山に呼んで書法を授けた甥の藤木生直が、貞享四年、東山天皇即位に際し、万歳の旌文を書き、後に「日本国中書道之本家云々」の院宣を賜ったのも、いふなれば寂源あつてのことだったといえよう。^{註7}

天台宗の学僧として、また大師流道統の継承者として、当代第一等の知的人物に、もう一つの癖があった。「やはり寂源は好事博雅の文人でもあ」ったとは、『高良山

十景詩歌』正統二巻を手にされた小高敏郎氏の言であつたが、寂源の文事癖は、漢詩・和歌を始めとして、関心は連歌・俳諧にも広く及んでいたと考えられるのである。そこでまず、寂源の文事を象徴する『高良山十景詩歌』成立の意味から考えてみることにする。

○

『高良山十景詩歌』の発想は、寂源が高良山座主として来山して間もなく、久留米藩の儒医藤井懶斎と詩歌の贈答があつたことに始まる。懶斎はその折のことを「今ノ座主寂源ハ其最モ好キ者十境ヲ擇ビ定メテ高良山十名処ト為ス。(中略)寂源境毎ニ和歌ヲ詠ジテ、以テ四序ノ景象ヲ写ス。余モ亦輦ニ效」うとのみ記している(『北筑雜藁』)が、寂源自身は「ソノ初メ藤懶斎、予ガ山扉ヲ歎ク。日ニ相俱ニ丘壑ノ間ヲ遊歴シ、十奇勝ヲ擇ビ、十名所ト為シ、好士ヲシテ伝ヘテ之ヲ吟詠セシム」(『高良山座主旧記之抜書』)と記しており、博雅の文人座主の着任を待っていたかのごとくに懶斎が、寂源を尋ね、その交友の中から生まれたのが「十名所」だったの

であり、この時点において少なくとも両者による十景詩歌の作があつたのである。¹⁰そして、その後、上京した寂源が、花山院定誠・中院通茂の二人に謁し、十景の品題を定めてもらい、この二人を含む親王公卿二十名の詩歌を集めてもらい、更に、堯憲・高泉・運徹の三師に序・跋・記を請い、本書は完成を見たのである。この企てを嘉した藩主有馬頼元は、「裱背、帙函ヲ施シ、其ノ粧飾ハ錦繡金玉ヲ尽」し、「今般加ニ修覆」令「神納」候」との書面を添えて、奉納した(『高良山座主旧記之抜書』)。¹¹かくて『高良山十景詩歌』は完成を見たのであるが、この『詩歌帖』は、三百余年を経た今日も、高良大社の神宝として襲蔵されており、我々はこれを目のあたりにもることができるのである。

中央に「高良山十景詩歌」と題簽の形を置き、有馬家の紋を散した高蒔絵の覆蓋と函(堅壳尺六寸式步、横壳尺三寸五步、深サ五寸五步)¹²に収められた、全十三折の金襴表紙特大横帖(堅壳尺式寸式步、横壳尺四寸五步)、その四隅には、唐草に有馬家の紋を透彫にした錫銅の金具が施され、絹布の中央題簽には輪王寺守全親王の筆で

「高良山十景詩歌」と記されている。^{注13}

この横帖の構成及び作者は次のごとくである。

初折表〜二折表 序

天台宗日嚴院御門跡堯憲大僧正

二折裏 詩 妙法院御門跡堯恕親王^{注14}

竹樓春望

三折表 歌 近衛左大臣基熙公

三折裏 詩 転法輪大納言實通卿

吉見満花

四折表 歌 今出川左大将公規卿

四折裏 詩 柳原大納言資行卿

御手洗螢

五折表 歌 日野大納言弘資卿

五折裏 詩 高辻中納言豊長卿

朝妻清泉

六折表 歌 園 大納言基福卿

六折裏 詩 花山院右大将定誠卿

青天秋月

七折表 歌 中院大納言通茂卿

七折裏 詩 柳原侍従秀光

中谷紅葉

八折表 歌 日野中納言資茂卿

八折裏 詩 伏原少納言宣幸

不瀟山霽

九折表 歌 阿野大納言季信卿

九折裏 詩 東園宰相基量卿

鷺尾素雪

十折表 歌 烏丸大納言光雄卿

十折裏 詩 勘解由小路侍従韶光

高隆晚鐘

十一折表 歌 平松中納言時量卿

十一折裏 詩 曼珠院御門跡良尚親王

玉垂古松

十二折表 歌 白川二位雅喬卿

十二折裏〜十三折裏 跋 支那国伝法沙門性澈高泉

そして更に、この『詩歌帖』成立の経緯の全てを記し

た、前智積僧正泊如運徹による『高良山十景詩歌帖記』一軸が、黒漆の箱に入れて備えられたのである。

『詩歌帖』のこれらの作者は、現代の都の風雅を体現した最高の人々であった。であればこそ藩主頼元は、これを宝物として大社に「神納」したのである。このことは「鄙」そのものであった地が、こうした人々の詩歌に詠み込まれることで、たちまち「鄙」を脱して、「都雅」の世界に組み入れられたことを意味する。頼元が、寂源の「功」を賞し、神宝としたのも、自身の領内の高良山が、「鄙」を脱し、「都雅」の世界に参入することができたことを承知していたからである。そして、このことを実現させることのできる人物が、天台の学僧・清僧であり、大師流の道統を継いだ書家である寂源をおいてないことも、藩主以下全ての人々の諒解事項に属していたといえよう。このことを、高良山という「鄙」の視点から見れば、寂源という「都雅」を体現した人物の手によって、高良山は一挙に「都雅」の地として全国にその名を知られることになったわけで、堯憲が序文で、「山川ノ顕晦ハ人ニ繫ル」と言っているごとく、高良山は寂

源によって世に顕れたのである。とすれば、この『詩歌帖』に対する大きな反響が予想される。

○

その最も早い反響は、『詩歌帖』完成の天和三年八月から、ちょうど一年を経た貞享元年八月に出版された『高良山十景詩歌』正統二冊である。この刊本が、どのような手順でもって刊行されたものであったかを以下簡略に見てみる。

まず、刊本の内容を一覧表とし、神宝『詩歌帖』及び『詩歌帖記』との違いを確認しておく、

正集 一、高良山十景詩歌総序

貞享二歳次乙丑春正月

若耶桑村孚休子書于洛濑僦舍

三、高良山十景詩歌序

天和癸亥（三年）秋七月初二日

前大僧正堯憲書于東山休亭

四、十景詩歌（詩歌各十首、計二十首）

四、（跋）

(天和三年七月)

支那国伝法沙門性激高泉題^ス於佛国方丈^ニ

四、高良山十景詩歌帖記

天和三季歲次癸亥仲秋穀旦

前智積僧正泊如運敝書^ス干瑞応山挹古軒^ニ

六、高良山十景詩歌并序

天和三歲癸亥季秋下浣

權僧正寂源書^ス于不濡山竹樓^ニ

四、(識語)

(異日)

洛北瑞応休隠比丘泊如運敝識

八、高良山十景詩歌并序

天和三年十月望日

遯庵宇都宮御的艸稿

九、高良山十景詩并序

貞享改元甲子七月二十六日

釋、非際執^二毫^ヲ於台嶽蘇陀峯雜足院觀月亭^ニ

十、高良山十景詩

紀宗恒

七、高良山十景詩歌

貞享甲子冬十一月朔旦

因^テ高良山源公僧正命^ニ乘^二毫^ヲ於銅駝陌春風

堂^一

香河隣善

七、高良山十景詩并叙

貞享乙丑杪秋望日

山田原欽稿

七、高良山十景歌并序

貞享のはじめの年神な月の比ほひ

新玉津嶋寓居士季吟

のごとく、刊本正集は、神宝『詩歌帖』と『帖記』、つまり四・四・四・四に、一の桑村孚休子「総序」と六の寂源作「十景詩歌并序」が加えられることで成立し、続集は、全て新たに作られた、遯庵・非際・紀宗恒・香河隣善・山田原欽・北村季吟の都合六名(八十三)の詩歌でもって成り立ち、かつ、続集には、内題「高良山十景詩歌続集」と編者名「桜花散人田甫編輯」及び刊記「貞享貳歳乙丑中秋日 吉田元俊¹⁶板行」が備わっている

ことが注意される。

まず、刊本「正統集」の成立過程を時間の面から追ってみると、最初に㊦の十景詩歌が揃い、続いて天和三年七月中に㊧の序及び㊨の跋が添えられ、同年八月中に㊩の帖記が書かれる。ただし、最後の㊪識語には、いささか問題があり、書かれたのは天和三年九月末、或いは十月初旬の頃かと思われる。

源公、異日見寄詩歌一卷ヲ。其詩、次前十韻ヲ、其歌、詠前十題ヲ。合二十首並皆句々金玉、篇々氷霜、意味有レ余、称歎シテ不足。可_三以_テ貽_ニ後昆_一。故ニ再書_ス于_ニ卷尾_一。

「異日」が、「帖記」を草した後であることはいうまでもないが、この識語の中には、日次を推測させる手懸りはない。しかし、この識語は、写本『帖記』と全く同じで、一字の異もない。とすると、識語にいう「源公」の「詩歌」が、写本『帖記』にはなく、刊本には六「高良山十景詩歌并序」としてあることが問題となる。運敵は、寂源の二十首が、「称歎シテ足ラザル」名作で、「後昆ニ貽ス」必要があると判断したが故に、再度巻尾にそ

のことを記したのであり、当然のことながら、寂源の作二十首は、識語の前に記載されているべきだった。ではなぜ、刊本には六があつて、写本『帖記』にそれがいいのか、このことについて、少しく考えてみる。

神宝の『詩歌帖』が揃い(㊢・㊣・㊤)、藩主よつて装潢が整えられ、帙函に入れられ、神納されたのは、すでに見たように「高良山座主旧記之拔書」所載の頼元書簡により、天和三年八月十八日であったことがわかったが、それを受納した折の寂源の識語が、その書簡のすぐ後に筆録されている。「右十景之詩歌者」で始まり、「永_ク與_ニ經卷_一、納_ニ于_ニ文庫_一、不_レ可_レ出_ニ山外_一耳」で終る一七一字の識語であるが、この識語は、実は、刊本六の序文、三八六字の中に、大体そのまま生かされている。六の寂源の序文の日付が、「天和三季秋下流」となっていることを勘案すれば、㊦の『帖記』の奥付「天和三季仲秋穀旦」は、八月十八日以前であっても不都合はなく、また㊦の識語の「異日」は、「天和三年九月下旬」以降でなければならぬことになる。㊦・六・㊦の執筆時期を以上のように考えてみれば、八月十八日迄に、こ

の運敵の『帖記』は寂源のもとへは届けられておらず、少なくとも九月中は運敵のもとに置かれたままで、その後、高良山より寂源の序と詩歌が届けられ、それを讀んだ運敵が㊦の識語を書き付け、写本『帖記』を寂源のもとに送ったと考えられる。とすれば、写本『帖記』に寂源の序と詩歌六が書き入れられてもよかつたということになる。だが、現存の写本『帖記』にそれはない。これはどういふことなのであろうか。現在の資料では、これ以上明らかにできないが、あるいは、運敵が書き入れていたものを、あえて寂源が省いたのではないかと考える。それは、権僧正寂源の、座主という立場からする、親王諸家及び月卿雲客、はたまた藩主頼元に対する遠慮の気持が強かつたからではなかつたかと思う。だが、この遠慮の気持が、逆に本書を出版するということに対しては、積極的な作用をはたしたのではないかと思われる。以下、このことを、下巻統集の成立過程をたどることで、考えてみることにする。

○
運敵泊如の職語が書かれた天和三年十月の時点において、『高良山十景詩歌』正集の、総序を除いた中味は揃つたわけで、この『十景詩歌』は、運敵を通して都下の詩人・歌人の目に触れる可能性を持ったことになるが、一方では、寂源自身による積極的な働きかけがなされてもいたのである。

統集冒頭、宇都宮遯庵の八「高良山十景詩并序」の成立は、「天和三年十月望日」で、運敵の㊦「識語」が書かれた日次と相前後していたといつてよい。運敵と遯庵が詩文の仲間であることは、『遯庵詩集』（正徳三年刊）を見ただけで明らかであり、すでに運敵から噂が伝えられていたであろうことも十分に考えられるが、序文の中に、かつて横川において寂源と共に天台教学を学んだ雞足院非際のもとに、寂源より、遯庵に是非共十景詩を作ってもらふようにとの依頼があつたことを聞き、断わりきれないままに作つたとの記述があり、遯庵の場合は、運敵が寂源の六「詩歌并序」を入手したとほぼ同じ頃に、非

際の手を経ていま一つの写本が遼庵のもとへ届けられたとも考えられ、また運徹の手にあった写本が廻わされたとも考えられるが、いづれにせよ、遼庵は、寂源の六「詩歌并序」を含む正集□・■・四・五・六・田の全体を見た上で、執筆したことは確かであろう。

天和三年十月より九ヶ月を経た貞享元年七月、今度は枳非際が九「十景詩并序」を草し、その三ヶ月後の十月、北村季吟が十三「十景歌并序」を書き、続いて十一月に香河隣善が十一「十景詩歌」を作っている。紀宗恒の十「十景詩」もこの間の作と思われるが、残念ながら日付を欠いている。^{注17}これら貞享元年七月から十一月にかけての動きを受けて、貞享二年正月に一「総序」が執筆されたであろうことが考えられるが、このことは、非際・遼庵・季吟を中心とした詩歌のグループによる『十景詩歌』出版の計画が持たれ、一応の完成を見たことを意味しているかと思われる。ただし、山田原欽のみは遅れてしまい、貞享二年九月迄、約一年近くの間隔を置いて、貞享二年八月の奥付でもって吉田元俊より刊行されたことになるが、原欽の十二「詩并序」の日付「抄秋望日」からすれ

ば、実際上の刊行を見たのは、九月末、おそらくは十月に入っていることだったかと思われる。

では、この出版を考えていたかと思われる貞享元年七月以降の、一連の十景詩歌の創作は、具体的にはどのような事情のもとに進められたのであろうか。まず、非際から見ると、彼は自分の十景詩創作の顛末を、九の「序」において、

然^{シテ}後更自著^ニ十首^ノ詩歌^ヲ、又勸^{メテ}予^ニ賦^{シム}詩^ヲ。
予本不^レ窺^ニ李杜^ガ之宮牆^ヲ、何^ソ當^ニ其課^ニ乎。雖^レ固^ニ辭^之、強^{コト}之^ヲ再^ニ三^ニ未^レ止。故^ニ謾^ニ賦^{シテ}十絶^ヲ、
以^テ塞^ニ其責^ヲ云^レ尔。

と述べている。つまり、神宝『詩歌帖』の完成後、寂源が、自作の詩歌を示しつつ、非際に詩を賦すよう、再三にわたって求めてやまなかったことが窺えるわけである。十一の香河隣善の場合も、「詩歌」の奥付に、

因^テ高良山源公僧正命^ニ、乘^ニ毫^ヲ於銅駝陌春風堂^ニ。

と、やはり、寂源からの強い要請があったことが知られる。また、十三の北村季吟の場合は、その序文に、

何がしの僧正、(中略)高良山十景と名づけて、(中

略)よに風流ある人々には、詩歌にまれ、ほくにまれ、是を題せん事をもとめ給へるに、横河の難足院そのれあざりのきみ、此題の十詩をつらねて見よとてみせ給ふつゝるで、やつがれにも、此うたほくつかふまつれといひをこせ給へりし。

とあり、九で非際に「十絶」を要請したその折、同時に季吟へも「十景」の「うた」あるいは「ほく」の創作を要請していたことが知られるのである。十二の山田原欽が、ただ一人、一年近くも遅れて「詩并序」を寄せたことはすでにみた通りであるが、彼は「序」の中で、そうしたことになつた事情について、また寂源からの依頼・催促について次のように記している。

僧正又見^ル請^ニ僕^ガ詩^ヲ、僕許諾^ス。尋^ツ奔^ニ命^{スル}東西^ニ者^三、經^ニ寒暑^ヲ、匪^ニ敢^テ忘^{タル}也。江山水雲未^タ曾^テ入^ラ夢^ニ耳。今^{コト}茲^シ到^ル洛^ニ、僧正先^ニ在^リ、責^ル以^ニ詩^ス債^一。因^テ賦^シ之^ヲ以^テ償^{ナフ}焉。

僧正からの依頼を承諾しながら、多忙のため詩作の暇もなく一年が過ぎてしまつていたが、今年上京してみると、先に僧正も上京しておられ、自分をつかまえては、

詩を賦すことを促がされました。そこで以下の詩を作りましたと記しているが、貞享二年九月「風信状」執筆のために、寂源は上京していたのであり、京都での二人の出会いが事実だったと考えられる。したがつて、原欽が「序」中にいう寂源よりの催促も事実に近いものと考え、てよいであらう。

以上、続集の成立の日次と、その実情を探つてきたが、十を除く全てが、直接あるいは間接という違いはあつても、寂源自身の依頼を受けて執筆されたものであることは確かであらう。ということになれば、寂源の心の中には、続集への執筆依頼を思い立つた当初より、出版ということが頭のどこかにあつたことが推測される。一年近く出版を延ばしてまでも、二十歳の山田原欽の詩を載せようとした態度からも、そのことは窺いうる。天才少年詩人として天下に名をはせた彼の十景詩を載せることで、本書にさらなる花を添えようとしたに違いないからである。こうした志向は、あるいは寂源よりも版元吉田元俊の方に強く、寂源は結果としてそれに同調することになつたというのが正しいのかも知れないが、やはり寂源の側

にも、そうした意向がなかったとは言いつれないように思う。というのも、版元吉田元俊の本書出版に対する姿勢には、ある意味での積極性が感得されるからである。

そのことは、本書の「総序」を、桑村孚休子に依頼したことに窺える。孚休子が、古くからの遼庵グループの詩人の一人であったことは、『遼庵詩集』また『遼庵先生文集』^上の記事に明らかである。

『詩集』巻三の「十年瑟居難^二親睦^一」で始まる七絶に、「桑村^一、自^二若州^一、訪^三予^カ於京邑之客舎^一、賦^{シテ}一絶^ヲ謝^レ之」という詞書があるが、この詩が作られたのは、元禄十三年から宝永二年の間であることは、詩集巻三の前後の作品の年次より確かである。この詞書で、両者の交友に「十年」の空隙があったことが知られるが、一方の『文集』には、「元禄十五年七月」の日付を持つ「簀山集序」があり、この序が簀山の詩集『簀山前後集』に与えられたものであることが知られ、『詩集』の七絶もあるいはこの前後の再会の折のものだったかと推測される。また、この序文の中で、遼庵が、桑村家との累世の交わりについて、

桑村^一、簀山^{シテ}生^ニ于^二医家^一、長^ニ于^二儒林^一、博見^一洽聞、甚敏^ニ于^二詩作^一。(中略)昔在与^ニ簀山^一之亡父兄^一交情篤^シ、謂^ニ之^ヲ累世之通家^ト可也。

と述べていることが注目される。簀山は、若狭小浜の町人学者桑村丈之進で、元禄末頃に『雲浜八景』を刊行したことでも知られているが、孚休子^注は、この簀山の「亡父兄」に相当する人であることは確かであろう。ところで、その孚休子の「総序」には、寂源・遼庵との直接的交渉を示す記述等は見受けられないが、版元吉田元俊については、「一日落^ニ劔剛氏^ノ之手^ニ、彼以^テ寿^ニ于^二梓^一矣。或人^一請^フ予^ニ為^ニ総序^ヲ」^ニといった記述があり、版元吉田元俊の手に原稿が手渡された後に、「或人」が、孚休子に「総序」を依頼したことが窺われる。この「或人」を、版元吉田元俊とすることが文脈上いささか無理だとすれば、版元に頼まれて孚休子に依頼することのできる人物は、遼庵、あるいは季吟ではなかったかと思われる。版元吉田元俊が、五年前延宝八年、自作の七絶一首(下巻「勢陽十二境」「朝熊山」)を収めた『扶桑名勝詩集』三卷三冊を自ら撰し刊行した折にも、遼庵は、香川隣善・

紀宗恒とともに「有馬十二景」を詠じ、稿を寄せていたからである。また、季吟が「或人」に当るかと想像されるのは、季吟の代表的著作『湖月抄』六十巻が、延宝元年序で、この吉田元俊の手によって出版されてもいたからである。

以上、不明な点も多いといふべきであるが、かくて『高良山十景詩歌』正統集は出版されたのである。神宝『詩歌帖』の完成が、寂源の詩文愛好を助長し、その結果として、この版本が世に出たというのが正しい言い方かも知れないが、少しく見方を変えれば、この出版は、神宝『詩歌帖』に対する第一次の反響であったといつてもよいのである。親王家及び月卿雲客の自筆詩歌を集めた、現代の「都雅」の極北ともいふべき神宝『詩歌帖』に対し、版本の正統集は、その雲の上人達の「都雅」が、僧侶や士庶人のものでもありうるのだとする立場から、がっちり受けとめられたものだったといつてもよいからである。

○
こうした形での第一次の反響に続いて、第二・第三・第四次と、その反響が広がっていったことが、高良大社蔵の以下の諸資料及び季吟の書簡等によって知られる。

第二次の反響は、高良大社宝物館蔵の「十景詩 諸藩名家」と登録されている卷子一軸註22に収められた江戸の、幕府儒員十名の自筆の十景詩である。詩題と作者名とのみを記せば、

竹樓春望 整字林字士／吉見満花 竹洞／御手洗螢
火 孚軒林戀／朝妻清泉 野桃園／青天秋月 頤軒村
房喬／鷺尾素雪 紫巖伊綱／不濡山蒙 漸軒板寛／中
谷紅葉 鵬溟菊池搏／高隆晚鐘 詔亭南直／玉垂古松
順菴木貞幹題

の如くである。林整字の詩は、『鳳岡全集』巻五十五にあって、元禄元年の作であることが確認される。竹洞の詩の場合も、『竹洞先生詩文集』第五冊（巻八・九・十に相当）の中にあつて、その配列により元禄元年であることは間違いない。したがって、江戸における幕府儒員

による第二次の反響としての十景詩の制作は、元禄元年だったと断じてよい。『竹洞先生詩文集』所載「吉見満花」の詩題の下に「筑州高良山十景／瀬川富販求之」と割注があるが、現在のところ、瀬川富販が誰か、特定できないでいる。あるいは、柳営連歌師の瀬川時春・昌坪父子のどちらかの別号とも考えられるが、後考を期すことにする。誰が、どのようなツテで幕府儒員に十景詩を読ませ、その作が高良山へ届けられることになったかの調査も、今後の課題とする。

第三次の反響は、高良大社宝物館蔵の「高良山十景詩 五山十僧作」と箱書され、卷子一軸（巻子）に収められた、京都五山十僧の自筆ものである。制作年次は、巻首の「前南禅英中玄賢」の「叢社十禅翁賦高良山十景詩序」によって、「元禄五年二月」であることがわかる。詩題と作者名のみを記せば、

竹樓春望 前南禅在天叟正佐題／吉見満花 湖南令
瞻／御手洗螢 前南禅見相国頭靈／朝妻清泉 亀阜虎
令叟／青天秋月 前天龍古靈叟／不濡山冢 前建仁松
堂宗植／中谷紅葉 東山雲外東竺／鷺尾素雪 前建仁

黄巖慈璋／高隆晚鐘 慧峯祖辰／玉垂古松 龍阜野柄
大休叟元寔

のごとくである。この第三次の「十景詩」の制作は、玄賢の序に、「僧正、今復寄書、徵叢林社中之作」とあって、寂源が直接依頼したことによるものであることが知られる。京都五山の僧達と寂源が親しかったであろうことは、『十景詩歌』正集堯憲序中の「参禅之余、寝ニ処シ風烟ニ、吟ニ哢シテ花月ヲ、悠然トシテ自娛ス矣」といった文章や、同じく続集非際序中の「修ニ練シ遮那止觀之両業ヲ、禅熟シ且詩熟ス矣」といった記事に窺われるごとく、禅をも重視し、自ら参禅し、且つ熟達した人物であったことを考えれば、ただちに理解できよう。いま一つ、あるいは、この元禄五年の折に同時に作られたかと思われる水戸藩の儒員による「十景之詩」がある。『当山十景詩歌並歌仙筆者目録』（註）の中に収められたものである。これもまた、詩題と作者名のみを記せば、

竹樓春望 野伝／中谷紅葉 安積寛／高隆晚鐘 大
串元善／鷺尾素雪 森尚謙／不濡山冢 鶴飼直泰／吉
見満花 佐々宗淳／御手洗螢 中村願言／朝妻清泉

鶺鴒真昌／青天秋月 板垣宗懺／玉垂古松 吉弘元常のごとくである。吉弘元常が元禄七年に、鶺鴒真昌が前年の元禄六年に没していることから、この『十景之詩』の制作年次は元禄五年以前ということでは確かであるが、現在のところ、元禄元年か、あるいは同五年か、はたまた、それらとは別の年であったか、今のところ調べがつかない、これまた、後考を期すことにする。

最後の第四次の反響は、元禄八年十月頃、江戸幕府歌学方に召されていた北村季吟の周辺で起っていたことが、田中善信氏紹介の季吟書簡註25によって知られる。江戸の書肆ではなかったかとされる季吟の長女たまの婿、乙部勘右衛門宛、元禄八年十月七日付書簡の「尚々書」がそれである。

尚々、鶺鴒院より十景之詩哥、御頼申候。正立祈禱被成候、御礼のため、今度、随分きもいり進申候。近日、短冊二而、二十人分、上セ可申候間、便宜候ハ、被仰、可被下候。以上

この文面は、鶺鴒院非際より依頼のあった「十景之詩哥」(「高良山十景詩歌」だと推測される)註26についてよろし

く頼む。というのも、非際に対しては、次男正立の祈禱の御礼ということもあって、今回は積極的に協力しなければならぬと思っている。近々短尺二十枚を京へ上せたいと思うのでよろしく、というのである。非際は北村家出入の祈禱僧でもあったこと、そして、そうした両者の親密さが、非際に貞享元年十月について、再度十景詩歌の制作を季吟に依頼させたことが推測される。現在のところ、その短尺二十枚については、全く調べがつかない。これまた後考を期すが、貞享元年十月の非際の依頼が、「うた・ほくつかふまつれ」(続集季吟序)であったことから、今回も同内容の依頼だったかと思われる。

元禄八年の時点で、何故に非際が再度「高良山十景詩歌」の制作依頼をしたかということ自体が問題であるが、元禄八年六月に座主職を辞して京へ戻ることとなり、十一月下旬に「洛北鷹ヶ峰」に住んだことが知られることより推測してみれば、寂源の帰洛を知った非際は、その祝いに、再び「高良山十景詩歌」を集めて、歓迎しようとしたのではあるまいか。しかし、寂源は翌元禄九年二月二十三日に没してしまっただけで、この非際の試みは実

現しなかつたかと思われる。

○

以上、神宝『詩歌帖』の成立と、第一次より第四次にわたる、その反響のさまを具体的に追ってみたが、神宝『詩歌帖』が、「都雅」の極北として成立しえたが故に、「鄙」そのものであつた高良山の名及びその十景は、「都雅」なるものとして都の人々に迎えられ、さらに江戸の、あるいは水戸の人々にも、「鄙」ではなく、「都雅」なるものとして認められたのである。こうした十景詩歌の誕生は、元禄雅文壇における新しい文学の創造であつたといつてよいのであるが、寂源という人物の側から考えてみれば、必ずしも雅文学に生きた人ではなく、学僧として禅僧として仏道に生き、また、大師流の道統を継ぐ書家として、書の道に生きた人物だったのであり、雅文壇の人々のみではなく、当代社会のあらゆる階層の人々に仰ぎ見られる立場にあつたわけで、そうした意味あいにおいて、俗文学の側の代表者としての俳人芭蕉も、寂源を書の道をきわめた人物として慕う点においては、並々

ならぬ思い入れがあつたと思われる。その芭蕉の願ひを入れて、「いとやすく」と筆を染て、幻住庵の三字を送（『猿蓑』巻之六）つてやるところに、実は、寂源の面目躍如たるものがあつたことに注意しなければなるまい。この寂源のとらわれのない精神の自在さが問題なのである。雅文学と俗文学を一つの精神でもつてすくいあげるほどの、精神的自在さと広さとが用意されており、その精神は、仏道、書道ともいなるものだつたと考えられるのである。この精神の自在さが、広く『高良山十景詩歌』正統集以下の反響を叫び起すことになつたのではあるまいか。寂源における自然観・芸術観、はたまた人間観と芭蕉のそれとは、全くの一枚岩だつたように思われるが、これらの問題については、別稿を期すことにする。

注

- 1 小笹喜三『大師流書家伝記資料学要』昭和十二年。
- 2 内閣文庫蔵『比叡山子院譜』正徳頃成立、写本。
- 3 注1に同じ。

4 高良大社蔵『高良山座主旧記之抜書』（明治四十三年五月写）附載「寛延元年座主寂信僧正代寺格書出タル扣厨方ニ有之更騰写ス」の一条に「筑後高良山座主清僧、彦山座主妻帯」とあり、座主職につくものは「清花家之猶子ニ相成」ることが習慣だったとある。

5 前出『高良山座主旧記之抜書』

6 高良大社宝物館蔵『高良十講会縁起』一卷一軸。

寂源自筆の奥書は次の通りである。「寛文九年八月十六日高良山住職被／仰出之刻本庄宮内少輔道芳年来／被所持之旨子息平七郎給之則／懐之而登高良以備什物者也／延宝九年二月二十三日権僧正寂源誌之／右高良仁王会之縁起者世尊寺行俊卿／真翰之由道芳口伝也」

7 祐徳稻荷神社中川文庫蔵『楓園家塵』巻一八四所収「奉送蓮台院主寂源僧正詩序」による。猶、拙稿「鍋島直條と寂源僧正―『楓園家塵』抜書（四）―」「文芸と思想」48号、昭和五十九年一月参照。

8 注1に同じ。

9 「芭蕉関係の資料若干」『連歌俳諧研究』16号昭和三十三年七月。

10 藤井懶斎は延宝二年五十八歳で久留米藩を辞し京へ戻る。従って、寂源との交遊は、寛文九年冬から延宝二年にかけての四年少々々の期間に限られる。猶、『北筑雑藁』は『筑後地誌叢書』（筑後遺籍刊行会昭和四年刊）による。

11 『高良山座主旧記之抜書』には「天和二年八月十八日」とあるが、「二」は「三」の誤りであろう。

12 箱と帖の寸法は、高良大社社務所編『当山十景詩歌並歌仙筆者目録』明治二十六年六月写による。

13 泊如運敵の『帖記』の中に「其籤題、者翰王寺守全親王染^ム翰^ヲ」とある。

14 以下作者名の書き方は、注4『高良山座主旧記之抜書』の「当山十景詩歌之作者」による。

15 文字は「季」に見えるが、「季秋」で「すえのあき」九月と考えた方がよい。誤刻と思われる。

16 「俊」を原本は「俊」に誤る。猶、吉田元俊について、注21を参照されたい。

17 紀宗恒は、高橋宗恒とも称し、初名、幸治。備州

守。『復軒詩藁』に「紀備州丈人、才巧詩賦。尤長於本朝礼典之学。朝廷修立坊立后之礼有司之事、丈人実有力焉。去年臘月勅賜白金若干云々」とある、との御教示を渡辺憲司氏よりえた、記して深謝申しあげる。

18 注1に同じ。

19 年令は『増補近世防長人名辞典』（マツノ書店昭和五十一年刊）の「ヤマダゲンキン山田原欽」の項による。

20 桑村氏について、また、『雲浜八景』について、上野洋三氏の御教示をえた、記して深謝申しあげる。

21 本書の小出永菴跋によれば、本書が「一風人」の提言により、吉田元俊が自分で撰び、自分で刊行したことが確認される。したがって本書の書肆「中御門通樞木町 書肆吉田四郎右衛門」は、吉田元俊その人であることがわかる。

22 高良大社宝物館蔵一卷一軸。外題等一切なく、十人の自筆懐紙十紙を継ぎ卷子に仕立てたもの。箱蓋

上部の宝第20号のラベルの下に「十景詩／諸藩名家」とある。

23 桐箱入り。箱蓋中央のラベルに「宝第19号」とあり、題簽に「高良山十景詩 五山十僧作」とある。

第一紙より第十一紙まで、各自筆の懐紙を継ぎ卷子に仕立てたもの。

24 注12参照。

25 同氏著『初期俳諧の研究』（新典社平成元年刊）所収の「北村季吟書簡抄」による。

26 「十景之詩哥」とのみあって「高良山十景之詩哥」とはなっていない以上は、他の十景詩歌ということも考えねばならないが、非際との関連から、一応「高良山」ではあるまいかと推測した。以下は推測の上の推論であることを諒とされたい。

付記 昭和五十九年十二月寂源の墓を捜した折、横川一带を御案内頂いた今西祐一郎氏に深謝申しあげる。また、高良大社の資料調査の際、心よく御世話頂いた糸永新氏に、今、改めて深甚の謝意を表します。